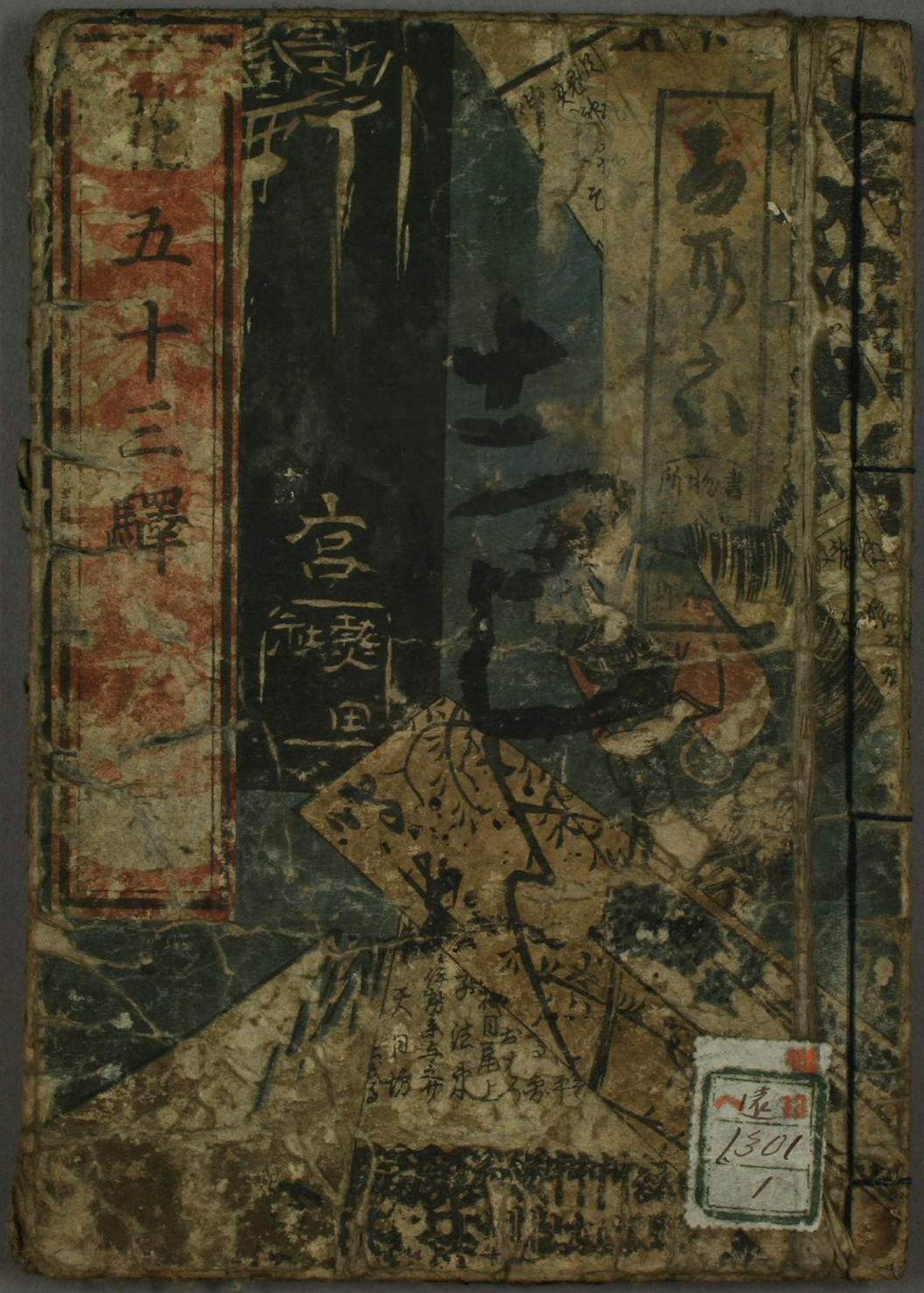

五十三驛
宮城縣
十二
所物書
東京帝國大學
法學部
天保物
1301
1

門 表へ 1361
1-12

天日坊
一代記

吾嬬下五十三驛

全部五冊

東都 玉塵園雪住作

明治三十九年一月二十九日
水谷弓彦氏寄贈

金澤文庫

家葉集に載る歌に「伊勢川を新見て今や昭君
と映の家といふ歌の落款とうして要之が金坂の関乃ほとの京
新見てふ名も出る如くに月の約と称せし文殿の機
文ふんまいうまた今は冊子も就ては名を伝て責辛
撰して今や橘本に載せるに人丸の歌のみんやう
却同てよ幸ひ如何おいとも人の毛ぬ美今の七夕
情幸の語和ふ人くい撰ふとよく責て後篇へいく
う神び板元仏ともに時に逢坂の関とせうく急仕事んの
ま見つ千夜序又とき時に彼方月のいろ哀れ時りその日

御墨附
天日坊

觀音院
假ニ菓子法策
伊勢參与之助
後ニ天日坊
實ハ清水冠者義高
觀音院
下人久助
實ハ大江大膳太廣元
大江廣元

鈴鹿の田村太郎
本名
竹川徒賀多正治
人丸の於六
喜瀬川屋於仙
蔵光姉桟
三重ヒロ作画

北条駿河之丞
成澤隼人
傾城高圓

第初版　京の巻
第二版　大津の巻上下
第三版　磯崎横田川の巻
第四版　水口の巻
第五版　土山坂ノ下の巻
第六版　四日市桑名の巻
第七版　渡船の巻

吾嬬下五十三驛卷之壹

○第一版　京の巻

是月夜逢会山と春若く明るの月りと人後生い変る
世の業人右大臣敦敦々の世代とやむのこれ神文さ
八幡九宮の雲井やぐみぐらみまのいさ海き千
とせの春の三年と知と嵐の世の恋人世代帝御
ゆて義とせめつつ久しくまべ百度百回眉をひ
法寺法山と世行鳥ゆ歌と歌とせめつり

ようそふさ四郎のおとうとく猫金山さ行て伊豆のも
沢さ行ひとねせ〜隆親言流といふの武士中ふ
たさ比ようて行文の青ろ郎家嘉殿さ何ようせうかと
日野園中納言ろ冠者来いうめしく豆出く色うは巳
コリヤく伊豆さ武者四郎ろ身あちく法る法山さ
作せく大法師法と行りせらうきたいつるくきるーさ
又人ぞ儀くうせあつる今く四郎の玉るみてさいつ
ぞろ右大将頼朝ろ木曽義仲四郎代行し時義仲さ屋
る猫間中将ぐ姫い義仲の宝ようて山吹四郎ろとるさ

きぐ義仲ぞびてようし山吹四郎ろ月数ようを怨念猫と
ようよるく小方子の方ようし出雲殿の家の掛さ来
て恨ませるにようろ猫ろ命の四郎ようるし
見ろ伯ようし及禁裏せ後の武士石田の三郎為久と
駿河ようし時矢のあへふ命せうを暴自の法と以てろの
猫代四郎治をべきよ物命ある又伊豆の玉せ沢ろ
隆親者親言流と学へしい者代の法力を以ようの猫
を走ようふ逃けく四郎平氏行せんとるし三人の
くに今見へ者べさ者アしくあきへ又人ろ別親

寺院でうるさくこゝへと性しの打掛糸の方より入来る時
弟者親子院さぐけの元より成行く糸大津より来る
ちく旅宿致しけるし和糸ゞ法衣の敷写を達せと
みて此度快猫の変化を見くべきに寺院物命を法い
別ち糸門中ともいろ〳〵どゝも糸ゞ法力ハ薄く人の知
所ハ〳〵猫い物ろう殺へ古人の聽ろう先又目より忍ぬ
急仰ろうとも走よ逃げく覆滅を安んじ奉る
見てその所法の西ういよくれすくけ長くれ行くハ
そ仏恵寺として三百余年〳〵重ろうの寺を後より

蓮ハ出ざるまへといつゝり日野屋中紀言を長いうのくハ
寺を参ひろる倫言汗のわ〳〵とさへ中せば一変物後
打しの砂ろ仏くろ寺をひろでぐぬイヤモウそまさへ
思ろうまもるかゝハ行義と濃〳〵丹精と抽で仏幅年
義あゝせらるく中ろ流変仏文合中てぐる行ろばろ
仏行後ゝ元郷ろまてよハッと言へて紀言流ハ
大庭陽く入ろろう打掛ゝ出来る石面のろうろへ
寺絶の神も中廣く変化ゝ流の物命と無ゝかゝ
る自慢良同〳〵数日の時ゝ〳〵おく起り大ハ面

ゝもまぐるゝと紙厚重森の弦ゝとたゝ振り暮目の紙
矢いりゝく撫へく都の子るゝる岩剛丹下と新
て之出門並居る人と死見よ見申り赤く方ゝも
並く素赤くも物皇の都ゝ武士も多きその中に
素ゝは変の変化巨法せゝものかゝ見物命見ゝ流
て家おより別ちお法巨皇ゝ出きゝ猿河ゝ時ゝ
いゝく敵ゝるゝ申ん巨今ゝ流ゝく死沢手美役員と
号第ゝゝんと申ものゝとゝ申ゝ出ゝゝゝゝゝゝ
並居る之都皇もゝと拵へて申ゝくいゝゝも巨流の

いゝゝく居ゝ左切の出用向ゝゝ都ゝ面ゝ紙ゝゝ
波ゝゝゝ以の外今ゝ変へ見人きたゝ流変祇ゝく
駆ゝゝ申ゝいゝゝ変ゝ走ゝ出ゝゝゝゝと咲ゝの門ゝ
出来る猿河ゝ時矢ゝ見ゝ時矢ゝ見ゝ時ゝ大級の紗絡今せ
ゝゝく ゝ矢小脇ゝゝ都ゝ荒微ゝ板と
石具ゝ敗下ゝく ゝ歩ゝ面の三布見ゝゝ
ヤア巨いく猿河ゝ変ゝ物命ゝ赤ゝ万葉の三
ゝ脳きゝ変る猫の妖怪と巨法の役目武士ゝ多ゝ
ゝ暮目の法と行ゝ者ゝ屋ゝ素ゝゝ物皇ゝ紙

日野岡中納言
勅命ふかくして
観音院
糸口の
図

観音院

る所の面目今新たにうもおぼえず陛下ふ何ぞ殺さべき
筆見ふ俗く素い先刻ようお法きあの形と通ありる
を平麦役目と名案ふ殺をといみの形やせバ行ゆう
四之服もたりそのみるこのきこそ糸が紡術よばべてい
きあの紡術い小児の就ひき年来晩絲の糸と赤藥
ふ万のきあと紙日ど中ゆうれ地獄と医い糸ゑ身ゆうれ
ていちと遠慮ふ万みるの文ゆませよ藝にちゆのゆる
とも知らず物室ふ新しと集まかけての今日の通刻
知りのこと不来ふ万何とこゆうでいでこゆぬうといて

是こそこそうと殺ふ所ある待遠りし い不調法ふ万
彼変化の出る時刻い待ちたり何之の刻沿ようや遠
遠のたりこそも平麦文を海ぞるこ見ぞようや何
こい地そくた彼変化そぞこよ紡ゑまバ物命ようい宵く
すぐに思くいふ者いそ業ふ体きあひを術の中乙い
そ業と見こそこそ初まといくるえや知こて遠いか
こくも言抜ようふ今日の変化正法あんできあへ譲ふ
ぞ。イヤそふい系るゆい変化正法ふけ付ゑ入ゆきでい
地んでもるいゆハ〳〵コリヤ地〳〵いアレ出ようゆ丹一彩

ばけ物なぶ変化の猫と今宵正治するものなり
つぶさに正治らまをうけ保ゝ駿河しみなぶ正治る
ものゝ猫いちと猫ぶ毒ひやをみとりて儀うり光剛
丹下いうなぶくお豆腐の作のあうけ化物ハ駿河みな
なるゝ鴻系ぶ名のうへうを定とやりて化物ゝ貴矣
なるうぶ正ぶなの疫も風のあもおあひのさくとうけ
ゝなるゝ物際でハ駿河しみなぶ正治る猫ハ大
方三味線のねこ抜といふやうなりのでおぶうまりやう
なる行出来ゝコリヤ丹下の大体を信ハの

あぶくるゝとゝふ円若る激口の弱ハ性ゝ不時刻ハ脳
の抜ゝ行ゝイザハさうひもを信ゝ蛇ゝ矣ハ
ハれも不和疫ゝて後疫の猫茶本の第ゝ子の刻
や猫の変化の時をひく変ゝ性矣をひうハさん時を
時ゝて物のゝうゝ亜殿の者ハ俺ゝうを眠ゝまさゝつ
ゝ猫ハ実ゝも怪ゝきけ物ゝうゝ抜ゝ叫ぶう
ゝて組と蔵ゝ来ゝるゝやうち風一天儀ゝうゝ抜ゝ子
の方より一変の毛雲花来ゝると見る円ゝ紫震殿矣
敵の抜ゝ止ゝまう勿ち雲の円ゝうゝさまゝろゝきねて

那つまと大屋てこてを抜ひつかまと石田の三つゞ森の子
なる岩剛丹下い行幸して一人よ猫をせんあとひそ
うふ階の元こ隠まて弟あとうあてあらしゞ体を
乃くとうもを乞り出くよ捕こせんと左向へ猫をさか
ゞう日月を並べ樹さるごくくるる脳を鳥し乞りと
白眼月二つこ裂しせさ尾をちつくと左て死来る勢
ひ猫序のごくなのきべゞうとをうた岩剛丹下遠へ叫
ゞと逃弩へ彼方へ退結け方へ逃を牧も教しく長左
らを丹下いちへぞきゞけしのよへらゞ死上きべつゞ

ひく猫も死ようさと跳きべ岩剛いうんとのつけ
こ例を物を打ちう引よ馬よより月射よ死毒る矢二
筋をこ筋へ移よちしと左ちう今一筋へ彼猫の
を腹ゞと結つうあくまゞそ毒和の痛よにこしの
猫も海うとて探千よう動と落くうゞ
と乃ろう強ゞへ射矢が命る荒波
片よよ猫をちく押へ片よよ松明と考よく結
ゞく強ゞへ弓矢撃へをり家の猫を見ゞよ踏居る
さしもつぎの樹あうく変化自在と笑へし猫を

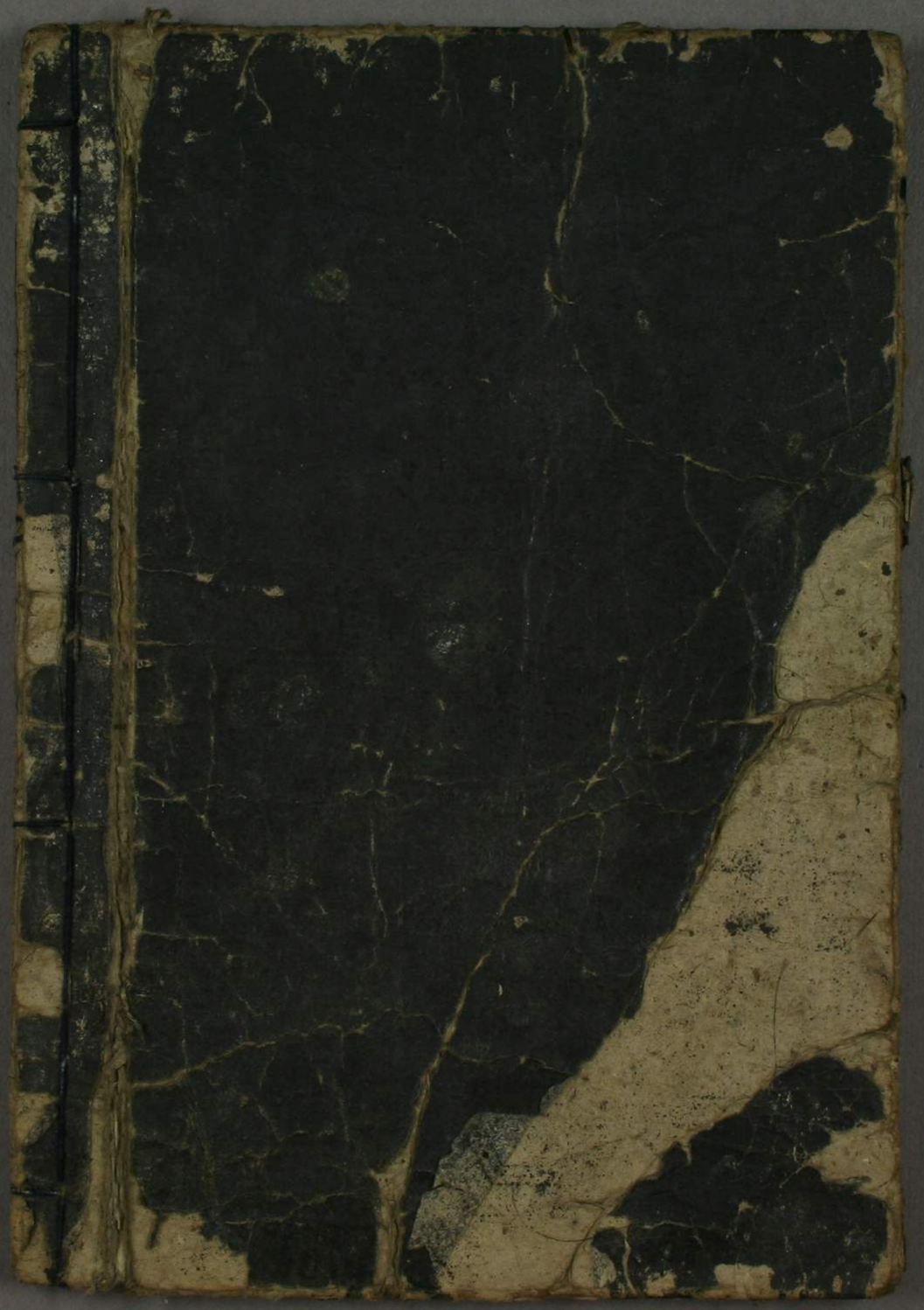
北条時貞

石田為久
岩淵丹下
荒波主税

強ひしかば時矢が射篠しうち出人々申つるは
と笑ふ石面の三郎あきの亜殿のくゝ笑ひ
来りけ体と見るく彩ひあれ猫をたゆきく射出
と泣く感じ射うくく笑ふ者ぞ嘲ける者
ざうろう優好移智の石面の三郎勢ちそこに出
強ひしかばと押のけく遠い廉勢ふ時矢仮猫ふ射
命しけ紙矢い糸の矢ゝそりし内時ふ殺已矢ふる
にふ人のわまきを奪りんとて時矢が射留しかど
とい所脇ひしれやしかは見ぞ我矢ふ絡きあるれば猫い

糸が射留しうくく居ふきとりけり
時矢笑ふと打ち遠い石号保の紙形ふるあるる
糸が射ふる矢を惜ふよおぢく美人あり生涯の矢を
目面をまくく被面の杉ふ射ふてたりさあるのまの
らんうとも糸が矢い糸の性名を泥しを亜ふ見ふ
まくく[illegible]ふる矢をびめふくく目のあへ突つけ
らふをそ見れをいうふも抵中の[illegible]濃ふを性名を強
ひくくみふ泥しふ海ふりせうとの名本は[illegible]の
石面ふ面目ふく天意ふきく屁をいふゆる猫ふ泥

能猫に少利の寝気よりもみ身ざる紙を折りて手ぢか
うへらてぞ九くへうる既に悦猫兵法さきてみるの
用も之れ有よ金てせめいろれば威ありめ
猫にて火時火いあきこの書家と賜りつ夏夏夏
風に吸びつくん時火ゞ見や弓矢の物ちり

吾嬬下五十三駅 巻之一終

大秘庫